



ティムラズ・レジャバ  
ダヴィド・ゴギナシュヴィリ

# 大使が語る ジョージア

観光・歴史・文化・グルメ



話題の大使が  
語り尽くす

Twitter  
**15万**  
フォロワー超!

いま最注目のお国  
ジョージアの魅力!

シュクメルリ

ジョージアワイン

中世そのままの街並み

温泉...etc.





大使が語る  
ジョージア

観光・歴史・文化・グルメ

ティムラズ・レジャバ  
ダヴィッド・ゴギナシュヴィリ

星海社

246



SEIKAISHA  
SHINSHO



駐日ジョージア大使のティムラズ・レジャバと申します。

日本のみなさまに私の故郷であるジョージアという国をより深く、広く知っていただきたいという思いから、このたび著書『大使が語るジョージア』を刊行することになりました。

初めて私のことを知ったという方も、SNS等で私を見たことがあるという方も、どうかお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

ジョージアという国は豊かな文化と長い歴史、美しい自然を持ち、それに魅了された人々が世界中から訪れています。

新型コロナウイルス流行直前の2019年には日本からの旅行者が過去最多を記録し、コロナ禍でもジョージア料理「シュクメルリ」が注目を集めるなど、日本でも近年急速に

認知度が上がっています。幸いなことに、ジョージア最大の誇りの一つであるジョージアワインは、今では日本でも手に入るようになりました。

しかし、ジョージアの奥深い魅力は、まだまだ日本に伝わりきっていません。在日ジョージア大使である私は、ジョージアのさらなるすばらしさを日本のみなさまに知っていたくため、日々活動が続けています。

この本では、ジョージア大使である私ティムラズ・レジャバと、慶應義塾大学で国際政治学を研究するとともに、ジョージアの歴史や文化についての深い知識で活躍している在日ジョージア大使館専門分析員のダヴィド・ゴギナシュヴィリ博士が、ジョージア人の生の言葉でジョージアの魅力をお届けします。

本書を読んで、まず本の中でジョージアに旅行した気分になっていただき、さらに実際にジョージアに行こうと思っただけでしたら光栄です。このようにして、ジョージアに対する関心が日本中で広がっていくことが私にとっての大きな夢でもあります。

あるとき日本で、「ジョージアとはどんな国ですか？」と聞かれたことがあります。

少し考えて、私は「あつい国です」と答えました。これにはいくつもの意味があります。

まずジョージアの人々には熱があります。ジョージアに行ったことがある方なら、きっとジョージア人の熱さ、情熱的であることにはきつと同意いただけると思います

そして歴史も厚いです。紀元前の遺跡も多数発掘されていますし、世界で最初にワインを作った国だと言われています。

さらに地理的にも厚い、密度が濃いです。北海道と同じくらいの面積の国に、5000メートル級の山から洞窟、砂漠まで多種多様な自然環境が詰まっています。

そして最も強調したいのが「ジョージアのおもてなしは本当に厚い」ということです。

おもてなしの精神はジョージアでは古くから大切にされてきました。昔からさまざまな文学作品の中でおもてなしの精神が説かれていますし、ジョージアの文化をよく見ると、ブドウというジョージアのシンボルを中心に、おもてなしに合うように設計された文化であることが分かります。ジョージア人にとって文化とは自分たちだけのものではなく、お客さんにどう見えるかを常に念頭に置きながら育んできたものです。それは、ジョージアは来客があつて発展した国だからです。

ヴァジャ・プシャヴェラ（1861～1915）というジョージアで愛される詩人がいます。誰もが知っている彼の有名な作品に「客と主人」というものがあります。いかにお客さん

をおもてなしするかを描いたストーリー仕立てのもので、ちよつと極端なんですが、「家に入ってきた人には、どんな人にもおもてなしをしなければいけない」と言うんですね。自分の家に来たからには、仮にどんなに恨みがあつたとしてもおもてなしの心で接せよ、と。ジョーシアの究極のおもてなしは、本当にすごいでしょう。

なぜプシャヴェラがおもてなしを善だと語ったか。その背景には、人間は他人の心中を完全には見通せないという考え方がありました。自分が仮に誰かを善だと思つたり悪だと思つたりしても、それが正しいとは限りません。だから自分で判断するんじゃないくて、自分はいくまで精一杯尽くして相手の存在を敬えればいい、相手に最大の敬意を払えば、それによつて自分自身を立てることができると、必ず返ってくるものがある。これが今の社会にどのくらい合っているかは一概には言えませんが、この詩が象徴するおもてなしの精神はジョーシアの誇るすばらしい文化の型だと思ふんです。

日本には「鶴の恩返し」という、困っていた鶴を助けたら後でお手伝いに来てくれる、おもてなしをするということがあるという教訓を与えてくれる昔話がありますが、おもてなしの精神を共有する日本のみなさまに、ぜひジョーシアの文化を広く深く知っていただきたいのです。



話をジョージアのおもてなしに戻しますと、歴史的に見たならば、ジョージアにはいいお客さんばかりが訪れてきたわけではありません。

ジョージアが位置するコーカサス地域はアジアとヨーロッパの境界に位置し、東西の異なる価値観が衝突するためにさまざまな大国が覇権を争う舞台となってきました。過去、西はローマ帝国やビザンツ帝国、東はモンゴル帝国、南はペルシア帝国やアラブ帝国、北はロシア帝国と、あらゆる時代にあらゆる方面から侵略者が訪れました。ジョージアのほとんどの地域は過去に外敵の侵略を受けたことがあります。

しかし、困難に直面しても自分たちの文化を守ろうとするだけでなく、同時に懐深く相手を受け入れる、おもてなしをする、そういう開放的な姿勢があったからこそ今のジョージアがあるのです。いいものは取り入れる、そして昨日の敵が今日のお客さんになったときにしつかりとお迎えする、そういう精神があったからこそジョージアは国家としてのアイデンティティを保ち続け、今まで独立を保ってきたのだと思います。

ジョージアが自国への誇りと他者へのおもてなしの精神を両立していることは、その文化からも見て取れます。チョハという美しい民族衣装は火薬を収納するポケットをあしら

っていますし、今では世界中で親しまれているジョージアの伝統的なダンスの中には元々は軍隊の訓練から発展したものもあったり、人に会うときの挨拶「ガマルジョバ」は日本語に訳すと「こんにちは」ですが、元の意味は「勝利を祈ります」というニュアンスを持つていたり、ジョージア人にとって、いざというときに自国を守ろうという気概は常におもてなしと表裏一体といえるのです。幾多の困難を乗り越えて生き残るため、ジョージアは強くならざるを得なかったのです。

とはいえやはり平和が一番だというのはもちろんで、ジョージアワインを飲むときには必ず平和のための乾杯をするくらいです。

さらに私たちがお伝えしたいのは、ジョージアの住みやすさです。

ジョージアらしさとしてメディアで取り上げられる歌や踊りは毎日やっているようなものではないし、きらびやかな民族衣装も毎日着ているわけではありません。それを考えたとき、ジョージアの一番の魅力は住みやすさ、生活のしやすさだと思います。

食事はおいしくてバラエティ豊かだし、毎日ワインを楽しめます。有名な炭酸水のミネラルウォーター「ボルジョミ」があったり、地域ごとに湧き水があったりと水も豊富でお

いいです。四季があつて気候もよいし、温泉もあります。大きな海洋こそありませんが、高山からビーチリゾートまでさまざまな環境がコンパクトに集まっています。自然だけでなく、都会には芸術やファッションも集まっていますよ。

人が多くにぎやかな都会から30分もドライブすれば本当に田舎の生活スタイルが残っていて、ニワトリでも飼いながらブドウを育ててスローライフを満喫できます。私が先日ジョーシアに帰国したとき、首都トリシから車で25分くらいのところにある叔父さんと叔母さんの家に泊まりましたが、そこでは広大な畑でたくさんのお菓子を育てていました。ジョギングしていたら牛と出会いましたが、それくらいの田舎でした。

文化や自然環境について、欲しいものや行きたいところがあったとき、すぐに目標にアクセスできるのはジョーシア人にとっては当たり前で、それは外から見ると大きな魅力なのではないでしょうか。田舎暮らしをしながら都会に通勤して、都会と田舎の生活を両立している人も少なくありません。

そして国民性はおおらかでフレンドリーです。税金などの公的手続きも簡単でストレスがありません。インターネットも整備されていてノマドワーカーにも便利です。現時点（2023年）では日本との直行便こそないものの、世界との交通アクセスは良好です。ま

た、物価もリーズナブルでかなり安いです。

これらの快適な生活環境はもちろん旅行にも向いていますし、中期的な滞在、長期的な出張をするにもすばらしいです。データでもジョージアの住みやすさは証明されていて、コロナ前、ジョージアを訪れる日本人は年間1万人程度でしたが、なんとそのうち約300人が長期の滞在者でした。全世界からの観光客で見ても、2019年にはジョージアを訪れた人の数はジョージアの総人口の約2倍以上、935万人を超えました。

人生の何年間かをジョージアで過ごし、生活を楽しむ中でジョージアの文化に触れていただければ、きっと貴重な経験になるはずです。私は常に、ジョージアは短期中期長期のどの滞在にも向いている場所だと皆様にお勧めしております。

さて、ここまでジョージアには本当にいろいろなものがあるというお話をしてきましたが、ただひとつ今のジョージアに欠けているものがあります。それは知名度です。

ジョージアの知名度を向上させていくために、ぜひみなさま一人一人のお力をお借りできたら本望です。

ここで少し自己紹介をしておきましょう。

私ティムラズ・レジャバは1988年生まれで、さまざまな出来事が重なった結果、今では在日ジョージア大使に着任し、ジョージアと日本の架け橋となるべく日夜活動しています。

現在のジョージアの首都トビリシで生まれましたが、そのときはまだジョージアはソビエト連邦の一部でした。1991年にはソ連が崩壊してジョージアが独立しますが、その後まもなく、私は4歳のとき日本に来ることになりました。

きっかけとなったのは、私のおじいさんがある国際会議で日本の産婦人科の先生と出会ったことです。私の家は先祖の代から生物学者の家系だったのですが、私のおじいさんは、息子（私にとっては父）がもっと実力をつけるために日本で学んだらいいのではないかと考え、その知り合った日本人、角谷先生という方に相談したのです。

ただ、eメールがない時代なのでやりとりはなかなか難しく、しばらく音信不通の状態が続きました。そんな中、角谷先生がたまたま出張で海外に出かけたときに、同じ飛行機に乗り合わせた人が「私はトビリシに行くんだ」と言っていて、角谷先生は手紙を書いてその方に託したのです。それで交流が再開し、私の一家は日本に来られることになりました。

た。その手紙があったから私は今、ここにおります。

父は91年から広島に来て、私たち家族も後から追いかけて4年間を広島で過ごしました。外国人がとても少ない環境でジョージア人が珍しかったので、そのときから自分が外の人だという感覚がありました。その後はジョージアに戻ることもあれば、また引越してアメリカでも小学校時代を経験し、小学校5年生の途中からは父の仕事の関係でまた日本に戻ってきました。そこからは日本での生活が長くなりました。

日本に戻ってきた当時はまだ小学生だったので、ジョージアが何かをそこまでよく理解していなかったんです、外国生活が長かったですから。小学校6年生の日本人が「俺は日本人で、日本はこういう文化があつて、自分はやっぱり日本人だ」なんてあまり考えませんよね。私も当然そうでした。ただ、日本の集団に属さない自分が何者なのかを考えることはあり、それは自分の悩みでもありました。

転機は高校2年生の夏休みでした。夏休みに1ヶ月ほどジョージアに帰る機会があり、そのときジョージアの人々や自然と触れてすごく面白いと感じてしつくりきたんです。

一時帰国を終えて日本に戻ったとき、またジョージアで暮らしてみたいと思い、親にお願いをして、1年間日本の高校からジョージアの高校に移りました。そのときにジョージ

ア人としての自分が養われました。ちょうど自分のアイデンティティについて考えることが多い思春期に、いろいろな人と交流し、文学を読んだり混声合唱を聞いたり民族衣装に触れたりしてジョージアの魅力を再発見し、ジョージアの文化が自分になじむもので、過去とつながる自分のアイデンティティを証明するものなのだということを肌で感じたのです。つまり、それまで外国人として日本に住んでいるときに、自分に何か欠けていたものがそこで見つかった想いがしたのです。

このような経験を与えてくれたジョージアに恩返ししたい、ジョージアの魅力をもっともっとアピールして祖国に貢献したいと思って活動しているうちに、多くの紆余曲折はあったものの、気づけば駐日ジョージア大使になっていました。これは、まさに自分には夢のような天職であるでしょう。だからこそ一日も無駄にせず、この任務を最大限に活かしたいと責任を感じています。

私は20年以上、人生の半分以上を日本で過ごしていますが、ジョージアと日本の両方に住んで気づくのは、ジョージアと日本は、表現方法こそ違うものの表現したいものは一緒なのではないか、ということなのです。

例えばジョージアにはスプラという数千年も続いている宴会の作法があり、しばしばお

もてなしの際に使われます。いや、おもてなしの際にスプラが行われると言った方がよいかもしれません。スプラはおいしい料理とお酒が出てきますが、単に飲食を楽しんで終わりという集まりではなく、心の奥底にある言葉をお互いに引き出して人と人とがより深く理解しあうための崇高なもので、ただ乾杯をすればいいのではなく、しつかりとした流れが決められています。

一方で日本には茶道というものがあります。茶道のルーツをたどっていくと、やはりおもてなしの精神が根本にあると思います。ただお茶を味わうただけではなく、相手を楽しませ、リラックスした中でコミュニケーションすることによって新しい発見が生まれる、それが茶道の本質ではないでしょうか。

これはほんの一例ですが、ジョージアと日本の文化は見た目こそ全く違うものの、文化や伝統を大切にする両国には共通する精神性や価値観があると思うのです。

ジョージア人からしても、伝統を大事にする一方で経済的な発展を実現した日本には大きな興味と敬意を持っています。昨年、ジョージアと日本は国交樹立30周年を迎え、両国の交流を深めるさまざまなイベントが催されましたが、今後ともジョージアと日本の関係は深まっていくことでしよう。



そんな日本のみなさまに、ジョージア人の我々が感じる素顔のジョージアをお伝えすべく、ダヴィド博士と二人三脚で頑張りましたので、本書を楽しんでいただけることを願っております。

## 目次

まえがき 3

## 第1章 ジョージア各地の魅力と観光ガイド 21

ジョージアの基礎知識 22

首都トビリシに着いたらまず温泉に 26

トビリシは歴史的建築の宝庫 32

トビリシの教会建築 37

トビリシの街のシンボルとは 41

トビリシの隣町、世界遺産の街ムツヘタ 44

ジョージア中央に位置する第二の都市、クタイシ 50

ジョージア西部、黒海沿岸のリゾート都市バトウミ 58

## 第2章

# ジョージアの歴史と文化を深く知る

91

ジョージア奥地の世界遺産の村、スヴァネティ 64

大使が驚いたジョージアの奥地トウシェティ 72

軍用道路でドライブ 77

ジョージア旅行のモデルコース、ジョージアの本当の楽しみ方 79

ジョージアの文化と芸術を楽しむ 92

古城のホテルで、ジョージアの歴史を泊まって体験する 98

ジョージアのワインは世界一！ 102

ジョージアで最も大事な儀式、スプラ 110

ジョージアに行くときに気をつけたいこと 114

ジョージアの自然とアウトドアスポーツ 115

ジョージアの四季 121

第3章

日本でも楽しめる!?

ジョージア料理の世界

141

ジョージア人から見たジョージアの歴史 124

ジョージアの文字と言語 131

ジョージアの文学 137

ジョージア料理らしさとは何か 143

ジョージアの伝統と季節の料理 147

ジョージアの国民食ハチャプリ (ბაჭყალი) 149

みんな大好きヒンカリ (ბაგეტი) 153

日本で大人気のシुकメルリ (შუკმელი) 154

故郷の味、ジョージア風サラダ 156

ジョージアの野菜料理プハリ (გაბა) 157

ナスとクルミのバドリジャーニ (ბაღალა) 158

ジョージアの串焼きムツヴァデイ (მუცხადაი) 159

国民的な漬物ジョンジヨリ (ჯონჯორი) 160

家庭的な豆料理ロビオ (ლობიო) 161

ザ・家庭料理のオジャクリ (ოჯაკრი) 162

二日酔いに効くチヒルトウマ (ჩიხილთუმა) とハシ (ბაყ) 163

ジョージアの魚料理カルマヒ (კალმახი) 164

ブドウのスイーツ、ペラムシ (ბერძენიშ) 164

歴史ある非常食チュルチュヘラ (ჩურჩხელა) 165

お正月のお菓子ゴジナキ (გოშინაკი) 166

日本でジョージア料理を楽しむレシピ集 167



第1章

ジョージア各地の魅力と観光ガイド

## ジョージアの基礎知識

ジョージアという国の名前は近年、少しずつ日本でも聞くようになってきました。一方でジョージアの地理的な位置関係については、実はよく分かっていないという方もいらっしゃるかと思います。そのため、まずはジョージアの地理についておさらいしましょう。

ジョージアは北側はロシア、東側でアゼルバイジャン、南側でトルコとアルメニアに接していて、西は黒海に面しています。

このような立地からして、ジョージアがあるのは東ヨーロッパです……とりたいところですが、そう言う地理学者から反論が来るかもしれません。地理学的な観点から言うとジョージアは東ヨーロッパに属するという意見と西アジアだという意見があり、どちらとも言い切れないのです。ジョージア人の自己認識としてはヨーロッパの一部であるというアイデンティティを持っていますが、地理的には東ヨーロッパと西アジアのどちらとも断言できないのです。

ただ、私はそれがジョージアの強みだと思っています。ヨーロッパとアジアの両方にア



クセスできる地理的環境にあるのがジョージアという国だからです。人の往来もそうだし、貿易にも向いています。ジョージアは外交関係が非常によくできていて、アジアに対してもヨーロッパに対しても自由貿易ができるという強みがあるんですね。ヨーロッパからアジアに文化が流れるときの窓口になるのがジョージアですし、その逆もまた然りです。

ジョージアはコーカサスという地域に位置しています。大コーカサス山脈によってコーカサス地域は北コーカサス地域と南コーカサス地域に分けられ、北コーカサスはほぼ全体がロシアに入っており、南コーカサスにジョージア、アルメニア、アゼルバイジャンのコーカサス3か国が位置しています。その地理的な中心に当たるのがまさにジョージアなのです。

あるいは、海に着目すると黒海とカスピ海の間挟まっているという言い方もできるかもしれません。

ジョージアの国土の面積は約6万9700平方キロメートルで北海道よりやや小さいくらいです。結構こぢんまりとした国ではありますが、コーカサスという大山脈もあれば他方では海もあります。他にも砂漠まであったりして、ジョージア国内には熱帯以外のすべての気候帯が揃っています。北から南までの緯度の範囲が比較的狭い横長の形をした国で、

これだけの気候の差があるのは世界的にもかなり珍しいのではないのでしょうか。

国内にさまざまな気候があるので野菜や果物が豊富で、ジョージアの国を象徴する植物であるブドウは500以上の品種が育てられていますし、他にも季節ごとにリンゴやみかん、キウイなどさまざまな作物が収穫でき、食べ物の豊かさはジョージアの自慢です。また海や川などの水源も豊かですし、温泉もあります。ジョージアは温泉も有名です。

これから文化的な側面も見えていきますが、地理的な基礎事項を述べるだけでも、ジョージアが非常に豊かな国だということがお分かりいただけたかと思います。

ジョージアと日本の地理的關係をイメージすると、日本から一番近いヨーロッパがジョージアだと思っただけではないでしょうか。

日本からジョージアには主に2つ行き方があります。トルコのイスタンブールを経由する方法とカタールのドーハを経由する方法です。いずれも15時間くらいのフライトになるので遠く感じるかもしれませんが、時差は5時間だけなので、ぜひお越しいただければと思います。

ジョージアの人口は2022年時点の最新の統計では約400万人弱で、これは四国と同じくらいの規模感です。国内にはジョージア人やアルメニア人、アゼルバイジャン人、トルコ人などさまざまな民族の人々が暮らしています。一番多いのがジョージア人で、8割から9割程度を占めています。

ジョージアの首都であるトビリシの旧市街を見ると、数百メートル圏内の至近距離にキリスト教の教会があつたり、イスラーム教のモスクがあつたり、ユダヤ教のシナゴグがあつたり、またキリスト教の中でもカトリックの教会もロシア正教の教会もあつたりと、多くのものが共存するというジョージアの宗教的・民族的な多様性がよく分かります。

また面白いことに、トビリシのモスクは世界の中でもかなり特殊です。普通イスラーム教の人々は、シーア派はシーア派のモスク、スンニ派はスンニ派のモスクに通うのですが、トビリシのモスクはシーア派の人もスンニ派の人も一緒に礼拝するようになっていました。

ジョージアは昔から東西交易の要地で、シルクロードを含めて色んな貿易ルートがジョージアを通っており、その中で多くの民族と宗教が入り混じっていた地域になっていました。ジョージアのおもてなしの精神に触れて、暮らしやすいと思つて外から住み着いた人も少なくないのではないかと思います。19世紀に南ドイツからエルサレムへの聖地巡礼を

目指したキリスト教の宗派の一つが、大コーカサス山脈を越えてジョージアに来たところで歩みを止め、道半ばで定住してジョージアにポテトなどを伝えたという話もあります。

とにかく、住みやすさの中で、信仰の自由はとても重要だと思いますが、ジョージアはさまざまな物事に対して寛容な国であると私は考えております。実際に我が国に来たことのある方の多くは、この点は容易に領いていただけるのではないのでしょうか。

ジョージアという国の国土や人口について、駆け足ながら見てまいりました。次はいよいよ、ジョージア各地の魅力をたっぷりお届けしたいと思います。

## 首都トビリシに着いたらまず温泉に

トビリシはジョージアの首都で、100万人以上が住んでいるジョージア最大の都市です。トビリシ (Tbilisi) という都市名の由来は「トビリ」 (Tbil)、「あたたかい」という言葉で、その名の通り温かい水、つまり温泉が出ることで有名です。今、( ) 内でジョージア語を記していましたが、ここからは現地らしさをより感じていただくため、ジョージ

アの言葉はジョージア語も交えつつお伝えしていきたいと思います。

私がジョージアに帰国するとき、トビリシに到着したら長旅の疲れを癒すためにまず温泉に入ります。空港から街へ行く途中にも温泉があるんですね。ダヴィド博士も、この間ジョージアに帰ったときに真っ先に温泉に向かったそうです。みなさまもトビリシにお越しの際は、ぜひ温泉に入ってリフレッシュした後で観光を楽しんでください。おすすめは旧市街の温泉街で、古い街並みに歴史を感じることができますよ。

ジョージアの温泉が日本の温泉と異なる点もいくつかあります。ジョージアの温泉の多くは個室になっていて友人や家族と一緒に入ります。また、日本の温泉ではよく牛乳を売っていて、お風呂上がりの一杯は格別ですが、残念ながらジョージアの温泉には牛乳はありません。ぜひジョージアの温泉にも牛乳を置いてほしいと思います（笑）。日本では主に田舎に温泉があり、まる1日かけて温泉と周囲の自然を味わうことができますが、トビリシの温泉は街の中にあって、1時間程度でカジュアルに行くようなものです。あと、市街地にあるので露天風呂ありませんね。

トビリシの温泉についての言い伝えもあります。トビリシという都市の誕生にまつわる、トビリシの人なら、そしてジョージア人なら誰でも知っている有名なエピソードです。





トビリシの温泉（Shutterstock より、以下記載のないものは同じ）

ジョージアの王さまが狩りをしていたときに、愛していた鷹が雉を追いかけて戻ってこなかった。王さまは探して探して、熱い水の中に鷹と雉が落ちているのを見つけた。とても悲しかったけど、いい場所を発見することができたのでそこに街を作ることを決心した。このようなエピソードです。

ダヴィド博士は、歴史学の観点からこの逸話について次のような考察をしています。この話に出てくる王さまというのは5世紀の王であるヴァフタング1世（ვფთხე I）だけでも、トビリシという街がこの王の時代よりもっと古くからあったのは確実に、歴史的には矛盾があるように思われます。トビリシという街の歴史がどこまで遡るかは未だに調査中ですが、古代ローマ時代の温泉の遺跡が発見されていて、紀元前からあったことは間違いないですね。ではなぜこのような伝説が生まれたか考えると、ヴァフタング1世は隣町のムツヘタ（აგぼგოზი）からトビリシに首都を変え、王座を移転させたので、その事績とこの逸話は関連があるのかもしれませんが。

トビリシについては他にも伝説があります。王さまが鹿を追いかけて槍で一突きしたものの、まだ体力のあった鹿は逃げていった。後を追うとその鹿が温かい泉に入っていて、泉の効果で鹿の傷がたちまち治っていたが、その鹿のおかげで温泉を発見することができ



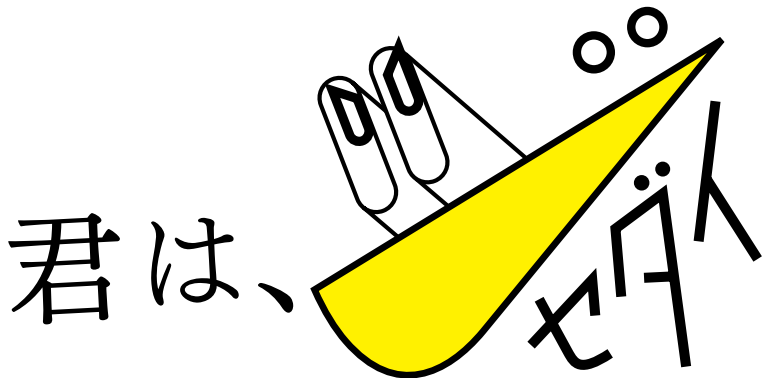
たというものです。こちらはあまり知られていない話ですが、ダヴィド博士はこちらの方が好きだと言っていました。

この2つのお話、みなさまはどちらがお好きですか？

他にも、悲しいエピソードですがこんな話もあります。1795年にペルシア軍の侵略によってトビリシのほとんどすべてが破壊され、略奪されてしまうという事件がありました。それはなぜかという、ペルシア軍のアーガー・モハンマド・シャーという将軍が病気を治すためにトビリシの温泉に入っていたものの、温泉に入っても快癒しなかったので腹が立って街を燃やしたのだそうです。これも伝承の域を出ませんが、でもこの年にトビリシが燃えたという事実はしっかり記録されています。

このように、トビリシと温泉は切っても切れない関係にあるのです。

トビリシ以外にも、ジョージアの国土は山が多いので温泉が湧いているところはたくさんあります。ただ、トビリシのように開発が進んでいるところは多くありません。他に温泉地というと、ジョージア中部のイメレティ地方 (იმერეთის რაიონი) にあるツカルトゥボ (წყალთუბო) という街は湯治療養で有名です。



何と闘うか？  
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、  
行動機会提案サイトです。読む→考える→行  
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ  
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう  
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月  
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。  
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、  
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**